

しんむら いづる
新村 出

1876年山口県生。東京帝国大学博言学科卒。
京都帝国大学教授。言語学。1967年没。
著書『東方言語史叢考』『南蛮更紗』『南
蛮広記』（正統）『広辞苑』（編著）など。
『新村出全集』15巻（1971—73年）がある。

ひらぎ げんいち
柊 源一

1909年京都府生。京都帝国大学文学部国文
科選科卒。上智大学教授。国文学、キリシ
タン文学。1981年没。
著書『文禄二年耶穌会版伊曾保物語』（翻
字・解題）など。

吉利支丹文学集 1

東洋文庫 567

1993年 8 月10日 初版第 1 刷発行

校 註 者	新 村 出 柊 源 一
発 行 者	下 中 弘
印 刷	株式会社 共立社印刷所
製 本	株式会社 石津製本所

電話編集 03-3265-0461 〒102 東京都千代田区三番町5
発行所 営業 03-3265-0455
振 替 東京 8-29639 株式会社 平 凡 社

© 株式会社 平凡社 1993 乱丁・落丁本は直接読者サービス係
Printed in Japan でお取替え致します(送料小社負担)

ISBN4-582-80567-1

吉利支丹文学集 1

平凡社

源一 出校註

装
幀
原
弘

目次

解説

一、吉利支丹文学の思想的背景

——キリスト教の成立から日本渡来まで

二、吉利支丹文学成立の地盤

——吉利支丹布教史をたどりつゝ

I キリスト教の伝播及び興隆の時代

1 聖フランシスコ・サヴィエルの来朝……………四

2 九州及び山口における布教のはじめ……………五

3 京都地方への進出……………五

4 九州における教勢の伸長と上方にお

ける最初の追放令……………五

II 最初の禁制と離伏の時代

1 秀吉の追放令発布……………七

5 長崎・天草の開拓……………五

6 信長の入京とその保護による宗門の

発展……………六

7 ヴァリニアノの来朝と活動……………六

8 少年使節のヨーロッパ派遣……………六

2 少年使節等の帰国と印刷機の輸入……………七

3 フランシスコ会の活動と日本最初の

殉教者……………五

Ⅲ 徳川初期における中興発展の時代

1 家康の宗教政策の変遷……………六

2 伊達政宗の遣欧使節……………六

Ⅳ 徳川幕府の迫害と宗門潜伏の時代

1 迫害から鎖国への道程……………六

3 吉利支丹宗門の潜伏とその復活……………六

2 島原の乱から鎖国へ……………六

三、吉利支丹文学……………六

Ⅰ 吉利支丹文学の意味……………六

Ⅱ 吉利支丹宗教文学……………六

〔イ〕新編宗教文学……………六

1 ドチリナ・キリシタン……………六

2 ヒデスの導師(信心録)……………六

2 ばうちずもの授けやう……………六

3 コンテムツス・ムンデ……………六

3 サルヴァトル・ムンデ……………六

4 ぎやどべかどる……………六

4 妙貞問答……………六

5 おらしよの翻訳……………六

〔ロ〕邦訳宗教文学……………六

6 スピリツアル修行……………六

	7 ひですの経……………	二〇九		3 サカラメンタ提要……………	二二三
	〔ハ〕ラテン文学……………	二一〇		4 アフォリスミ・コンフェッサリオ ルム……………	二二四
	1 イグナチウス・デ・ロヨラ著心霊 修行……………	二二〇		5 聖教精華……………	二二五
	2 バルトロメウ著精神生活綱要……………	二二三			
	III 教外文学……………	二二六			
	〔イ〕西洋古典文学……………	二二六		1 平家物語……………	二二七
	1 吉利支丹版に現れた古典の拔萃……………	二二六		2 金句集……………	二二九
	2 伊曾保物語……………	二二六		3 倭漢朗詠集卷之上……………	二三三
	〔ロ〕和漢古典文学……………	二二七		4 太平記拔書……………	二三三
	IV 古逸吉利支丹文学……………	二三四			
	V 吉利支丹語学書……………	二三八			
	〔イ〕文 典……………	二三八		1 羅葡日対訳辞書……………	二三三
	1 アルヴァレス編ラテン文典……………	二三八		2 落葉集……………	二三三
	2 ロドリゲス編日本大文典……………	二二九		3 日葡辞書……………	二三五
	〔ロ〕辞 書……………	二三三			

VI	ドミニコ会関係刊行書	三六
----	------------	----

1	ロザリヨ記録(一六二二年版)	三六
---	----------------	----

2	ロザリヨの経(一六二三年版)	三六
---	----------------	----

3	コリヤド編日本語文典	三六
---	------------	----

VII	吉利支丹文学研究のあと	四三
-----	-------------	----

四、	こんてむつすむん地	四二
----	-----------	----

凡例	四三
----	----

こんてむつすむん地	四七
-----------	----

目録	四九
----	----

巻第一	四七
-----	----

第一	世界のみもなき事をいとひ	五九
----	--------------	----

をまなひ奉る事	五九
---------	----

第二	Dをおそれ奉らぬ人のかくも	五九
----	---------------	----

んの実もなき事井にとくふ	五九
--------------	----

第三	真実のをしへの事	五九
----	----------	----

第四	よろづの事にけんりよをくは	五九
----	---------------	----

かき真のがくもんは何れぞ	五九
--------------	----

といふ事	五九
------	----

第五	たつとききやうもんをよむ事……	二七	第十五	人のあやまりをかんにんすべ き事……	二六
第六	みだりなるのぞみの事……	一九	第十六	いにしへの善人のかよみの事……	二八
第七	むやくのたのもしき心とけう まんをのぞくべき事……	二〇	第十七	よききりしたんのをこなひの 事……	三二
第八	みだりに人にしたしむ事をの ぞくべき事……	二三	第十八	かんきよもくざをこのむべき 事……	三三
第九	ことばをすごすまじき事……	二三	第十九	身をかへりみるこゝろのかな しひの事……	三〇
第十	ぶじをもとむべき事ならびに 善のみにさきへゆくなげ きの事……	二四	第二十	にんげんのはかなき事をしあ んする事……	三四
第十一	きにさかふなんぎをこらゆる にとくふかき事……	二七	第二十一	しするのくはんねんの事……	三八
第十二	てんたさんをふせぐ事……	二八	第二十二	じゆいぞとて御きうめいとと がにあたるくるしみの事……	三三
第十三	じやすいをのぞくべき事……	二三	第二十三	ぎやうぎをなをさんともえた つ心の事……	三九
第十四	かりだあでといへるDの御大 切にひかれていたすしよさ				

卷第二

二五六

- 第一 心中にDとむつまじくさんく
はいし奉る事……………二五五
- 第二 へりくだりをもてかんにんす
べき事……………二六二
- 第三 ぶじなるよき人の事……………二六三
- 第四 しやうくくなる心とひとへな
る心あての事……………二六五
- 第五 身のうへをしあんしたにんの
上をたゞすまじき事……………二六七
- 第六 きよき心のよろこびの事……………二六九
- 第七 ばんじにこえてJを思ひ奉る
大切の事……………二七三
- 第八 Dあたへたまふがらさの御を
んにたいする御れいの事……………二七四
- 第九 たつとき御くるすのごかうの
みちの事……………二七六

卷第三

二六九

- 第一 ふたごゝろなきあにまにたい
せられJの御かんだんの事……………二六九
- 第二 Dの御ことばをへりくだる心
をもてちやうもんしもちひ
たもつべき事……………二七〇
- 第三 しんくのがらさをこひ奉る
おらしよの事……………二七三
- 第四 Dとともにしんじつとへりく
だりをもてよろづをとりあ
つかひ奉るべき事……………二七五
- 第五 しんじつの大切のせうこの事……………二七六
- 第六 心のぞみをきうめいしてよ
くおさむべき事……………二七九
- 第七 かにんの事ならびにしきた

第十三	わがよはき事とげんざいのは	三三	第二十	此せかいにてあやうからずし	三三
第十二	ちじよくをこらゆる事つけた りまことのかんにある人 のしるしの事……………	三三	第十九	なんぎにあふときなにとやう にDをたのみあがめ奉るべ きぞといふ事……………	三三
第十一	Xの御かゞみをむねとしてげ んざいのなんぎはかなき事 をひとしき心をもてうくべ き事……………	三二	第十八	人のひはうにたいすることは りの事……………	三二
第十	わがしんだいをまつたく御あ るじD御一たいにのみまか せ奉るべき事……………	三二	第十七	わが身を大切におもひすごす 事はをはりなきたのしみの さまたげとなる事……………	三二
第九	まことのくつろぎをばD御一 たいにのみたづね奉るべき 事……………	三二	第十六	心のたしかなるぶじと善のみ ちにさきへゆく事はなにゝ きはまるぞといふ事……………	三一
第八	のぞむほどの事についてDへ 何と申あぐべきぞといふ事……………	三一	第十五	たにんのぎやうぎをみだりに たづねさぐるべからざる事……………	三一
第七	いなのぞみにたいしてたゝ かふ事……………	三一	第十四	かなき事をさんげする事…………… かずかぎりなきDの御をんを 思ひいだしたてまつるべき 事……………	三一

てたつしたるくつろぎなし

といふ事……………三四

第廿一人よりじやすいせらるゝ時な

すべき心得の事……………三七

第廿二いづれのしよさについてもと

くしんをみだすほどはすま

じき事……………三九

第廿三げんざいのほまれをいやしむ

べき事……………四〇

第廿四ほかの事にあまりこゝろをう

つさずないしんをほんとす

べき事……………四一

第廿五心のじゆうをえぜんだうに入

べきためたつして身をいと

ふべき事……………四三

第廿六人ごとにことばはしりやすき

物なればたやすくしんずま

じき事……………四四

第廿七人よりちじよくひはうをいひ

かくるときDにたのみをか

けたてまつるべき事……………四六

第廿八をはりなきいのちのためには

何たるかたき事をもちらゆ

べき事……………五一

第廿九天上のたのしみとげんざいの

はかなき事をくはんずる事……………四四

第三十をはりなきいのちをのぞむべ

き事ついたり善のみちにか

つせんするともがらにDや

くそくしたまふ御へんぼう

の事……………四八

第卅一ちじよくとなんぎにあふ時へ

りくだるこゝろをもてかん

にんすべき事……………五一

巻第四

第一 たつときあうかりすちやをう

け奉るにはいかほどのうや

まひ入べきぞといふ事……………

三三

第四 あうかりすちやをうけ奉るた

めにせいをつくして其かく

ごをなすべき事……………

三七

第二 あうかりすちやはかりなく

たつとくまします事ならび

にさせるだうてのくらゐの

事……………

三三

第五 ひいですをふまへとしてたつ

ときあうかりすちやを申う

けたてまつりじたのうへに

とがの御ゆるしをこひたて

まつるべき事……………

三六

第三 こんしえんしやをきうめいし

しんだいをあらためんとお

本語対照表

三九

三六

本書は、新村出・柊源一校註『吉利支丹文学集』上の復刊である。『日本古典全書』の一冊として、朝日新聞社より昭和三十二年（一九五七）十一月三十日に発行された初版により、柊源一の訂正本（ご遺族の提供）をもとに若干の補訂を施した。

吉利支丹文学集
1

新村 出
校註
柊 源一

解 説

一、吉利支丹文学の思想的背景

——キリスト教の成立から日本渡来まで

キリスト紀元一五四九年、即ち我が天文十八年、東洋の大使徒と称へられる聖フランシスコ・サヴィエルは、当時世界の学問の中心たるパリにおいてかち得た学者としての名声と、彼が希望しきへすれば実現されるべき教会の高位への昇進の道を捨てて、真の神を知らぬ東方民族の救霊に悲願をかけ、あらゆる困難と苦痛を忍び、インド、マラッカを経て、極東の島国日本の南端鹿兒島に上陸したのであった。その後十七世紀前半までの約百年間、聖フランシスコの遺業を嗣いだイエズス会員を中心とするカトリック諸修道会の外人宣教師と、彼等に協力した日本人聖職者及び信者の努力により、吉利支丹の布教が活潑に行は